

# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

プロスポーツで  
地域を活性化する！

72

2011 July

# プロスポーツで地域を活性化する！

3 **視点** プロスポーツと地域イノベーション 早稲田大学スポーツ科学学術院教授 原田 宗彦

4 プロチームと地域主権的なスポーツの世界 株式会社アルビルクス新潟取締役会長 池田 弘

6 スポーツの文化的価値を追求する「ガイナレ鳥取」 《鳥取市》

8 県民との感動共有を目指す鳥根スサノオマジック 《鳥根県松江市》

10 地域密着で地元へ活力をもたらす岡山シーガルズ 《岡山市》

12 市民が守り育ててきた広島東洋カープ 《広島市》

14 夢に向かって走り続けるFCバレイソ下関 《山口県下関市》

15 「若者たちの地域づくり」 《ふれあい体操で高齢者の交通事故を防止》 《広島県東広島市》

16 「地域に生きる企業家群像」 《株式会社本店 社長 辻均一郎》 《岡山県真庭市》

20 「企業連携レポート」 《ビタミンC誘導体で人々の健康と美容に貢献》 《岡山市》

22 「キラリ輝く元気企業」 《先行技術の開発で付加価値を提供する田中製作所》 《鳥取市》

24 「夢紡人／ゆめつむぎびと」 《戦略的農業を実践し、鳥根の農業活性化を推進する 佐々木 一郎さん》 《鳥根県浜田市》

27 「ご当地B級グルメ」 《周防大島みかん鍋》 《山口県周防大島町》

28 「藩ものがたり」 《広島藩》 《広島市》

30 新連載「ロカール線探訪」 《錦川清流線》 《山口県岩国市》

32 「国宝の旅」 《明王院五重塔》 《広島県福山市》

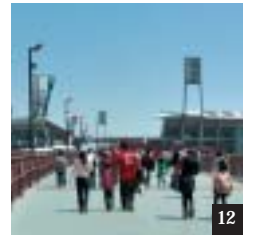
## 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

72  
2011 July

### contents



表紙写真：女子バレーボールのトップリーグで活躍する岡山シーガルズ（写真提供：岡山シーガルズ）  
目次写真提供：鳥根スサノオマジック・岡山シーガルズ・広島東洋カープ・広島国際大学  
表紙デザイン：久原 大樹（広島市在住）

\*本誌は再生紙を使用しています。

## プロスポーツで地域を活性化する！

### 視点 プロスポーツと 地域イノベーション

早稲田大学スポーツ科学学術院教授 原田 宗彦

地域を拠点とするプロスポーツが全国各地で誕生し、多くの人たちの応援を受けながら人気を高めている。日本のプロスポーツが企業スポーツを原点としていたことを考えると、プロスポーツは大きな転換期を迎えているといえる。



これほど活性化している要因として、一つには、自分たちの地域の活性化に貢献したいという「公益性」と、スポーツビジネスにチャレンジする「ベンチャースピリット」が地域プロスポーツの根底で合わさっていることが挙げられる。各地のプロスポーツの経営者たち取材して印象的なのは、プロチームを運営することとひと儲けしようという人がいないことだ。すべての経営者が、「おらが町」のために、地元の人たちと一緒に、プロスポーツを通じて地域を盛り上げたいという思いで経営に取り組んでいる。だからこそ、地元の人たちはプロチームに情熱を燃やしているのだ。

二つめは、経営規模は小さくても、大きな訴求力や効果が期待できることである。きちんと整備されたグラウンドや体育館などがあればプロチームを設立することは不可能ではなく、それにあわせて地域の情報発信力や地元のプライドを飛躍的に高めることができる。

また、プロチームが中心となってスポーツ教室を開催したり、商店街でのイベントを行ったり、高齢者との交流などを行うことで、地域に新しい変革をもたらすことができる。その意味で、地域プロスポーツと地域イノベーションは密接な関係にあるといえる。実際、二〇〇九（平成二十一）年に広島市に新しく誕

生した、広島東洋カープのホームグラウンドである「MAZDA ZOOM-ZOOMスタジアム広島」は、観客動員数を増やすだけでなく、周辺の人の流れの変化や新しい商店の誕生といった効果をもたらしている。

しかし、そこで重要なのはスポーツマネジメントである。プロスポーツが提供しているのは、プロスポーツの感動を共有するという「経験財」である。そのため、地域とのつながり、とりわけチームのファンとの関係を常に強化し続けることが必要だ。ファンは単なるスポーツ観戦者ではない。常に選手たちと一緒に戦い、プロとしてのプライドを共有し続けたいと願っている。「もう一人のプレイヤー」でもある。そうしたストーリーを形成することで、地域密着型プロスポーツとして成長することができる。

profile  
原田 宗彦 はらだ・むねひこ  
1954年大阪府生まれ。早稲田大学スポーツ科学学術院教授。大学院を修了後、鹿屋体育大学助手、大阪体育大学教授を経て、2005年から現職。主な編著書に、『スポーツイベントの経済学』『スポーツ産業論』などがある。

プロスポーツで地域を活性化する！

# プロチームと地域主権的なスポーツの世界

池田 弘

スポーツチームは住民が心豊かに生活するための「インフラ」である。チームの運営などに住民が参画し、一体感や連帯感を共有することで、地域の自立性の向上や、多様性に満ちた社会を形成できる。

## 地域に根差し、住民と支えるプロチーム

一九九六（平成八）年、「スポーツ後進県」と言われ続けてきた新潟県にサッカーリーグの「アルビレックス新潟」（当初は「アルビレオ新潟」）が誕生した。きっかけは、二〇〇二（平成十四）年に開催されたワールドカップの誘致だった。

ワールドカップの開催地に手を挙げるために、何よりも地元でリーグのチームを結成しようという機運が地元の人たちの間で高まり、アルビレックス新潟の設立となったのである。そうした地元熱意がワールドカップ関係者からも高く評価され、新潟はワールドカップの開

催地となった。

私は設立当初からアルビレックス新潟の経営に関わってきたが、常に目指したのは地域密着型の運営であった。新潟には一社でプロチームを支えられるような大企業はない。それなら、地域に根差し、住民との絆の中でチームを育てようと考えたのだ。

その思いを強くさせたのが、「リーグが発足にあたって掲げた「リーグ百年構想」である。その中では「自分が住む町に、地域に根差したスポーツクラブがあり、誰もが気軽にスポーツを楽しめるような環境が整って、はじめて豊かなスポーツ文化が育まれる」と謳っている。実業団チームが中心であった日本のスポーツ界とはまったく異なるあり方を示した百年構想は私の心を強く打つものであった。

## 「おらがチーム」という地域の誇り

地域密着型プロチームを実現するために調査を進めた結果、モデルとしてとり着いたのが欧州のクラブ、とりわけスペインの「バルセロナ」であった。

バルセロナといえば世界の一流サッカー選手がそろった「FCバルセロナ」が有名であるが、実はサッカー以外にもバスケットボールやハンドボールなどさまざまなスポーツの世界でも同様である。それはスポーツの世界にとって必要不可欠な要素である。これからの日本のあるべき姿は、さまざまな地域が生き生きと輝き、個性ある文化や産業を創出し、グローバルに活躍することだ。

それはスポーツの世界でも同様である。スポーツは住民にとってなくてはならないものであり、スポーツチームは住民が心豊かに生活するための「インフラ」ともいえる。だからこそ、中央集権的な世界ではなく、それぞれの地域が自分たちのチームを持ち、自分たちで選手を育てていくという地域主権的なスポーツの世界を構築することが必要だ。

いま、全国各地で多くのプロスポーツチームが誕生している。こうしたチームの運営などに住民が主体的に参画し、地域の一体感や連帯感を共有することは地域の自立性の向上や、多様性に満ちた日本社会の形成にもつながってくる。

## 観客の応援が選手を熱くする

こうした「地域でチームを支える」というビジネスモデルは、チームの運営に安定をもたらしただけでなく、後援会員になることで「おらがチーム」への思い入れも強くなっている。それは観客席を埋め尽くす後援会員の熱狂的な応援からも伝わってくる。

と同時に、熱狂的な応援はプレーする選手たちの成長も支えている。選手たちは後援会員の熱い思いに伝えるために練習を重ね、地域リーグからスタートしたチームは一九九九（平成十一）年にはJリーグに参戦し、さらに二〇〇三（平成十五）年にはJリーグへの昇格を果たした。

## プロチームと地域の自立・多様性

多様化が進む現代において、日本を



スタンドを埋め尽くすアルビレックス新潟のファン © ALBIREX NIIGATA



スタンドを赤く染める応援団 © ALBIREX NIIGATA



応援に熱く応える選手たち © ALBIREX NIIGATA・S

モデルで後援会員を募る方法であった。とはいっても、当時の新潟県民のサッカーへの関心は非常に低く、観戦にお金を払うという習慣はなかった。それでも、アルビレックス新潟を地域の誇りにしたいと願う支援者た

プロチームを運営している市民クラブである。しかも、親会社は存在せず、基本的に地域の住民が出資し、財政基盤を支えるという構造になっている。

には、エンターテイメント性だけではなく、「おらがチーム」という地域の誇りを前面に出すことで、新潟県民にチームを支えてもらうことが何よりも重要だ。

そこで導入したのが、法人一〇年間三万円、個人年間一万円という年会費

### profile

池田 弘 いけだ・ひろむ

1949年新潟県生まれ。NSGグループ代表、株式会社アルビレックス新潟取締役会長。77年新潟総合学院を開校し、理事長に就任。96年にアルビレックス新潟の代表取締役就任し、2005年から現職。主な著書に『奇跡を起こす人になれ!』『私と起業家6人の挑戦-自分の道を探す若者たちへ』などがある。

プロスポーツで地域を活性化する！

# スポーツの文化的価値を追求する ガイナレ鳥取

《鳥取市》

教職員によるアマチュアチームから出発し念願のJリーグ入りを果たしたガイナレ鳥取は、スポーツを通じてファンとつながりながら、スポーツの文化的価値を創り出そうとしている。

## スポーツを地域の 文化的価値に育てよう

二〇一〇（平成二十二）年に念願のサッカーJリーグ入りを果たし、鳥取県民の歓喜の声に包まれたガイナレ鳥取。その前身は一九八三（昭和五十八）年に結成された「鳥取サッカー教員団」である。その後、教員に限らず開かれたチームを目指して名称を「SC鳥取」に変更し、二〇〇〇（平成十二）年には中国リーグで優勝し、翌年にはJFLに昇格した。

JFL昇格当時は、NPO法人やまのみスポーツクラブがチームのマネジメントを行っていた。やまのみスポーツクラブは米子市内でスポーツサービスを提供していた団体で、スポーツマネジメントを通じて

「鳥取県には人のつながりを大切にする風土があり、高校などが全国大会に出場する時も芳名帳を回して遠征費を確保しています」と、SC鳥取で広報を担当している濱田正人さんは説明してくれた。

会費は大人年間三千元以上で、コースによってはホームゲームの全試合を観戦できる特典もある。現在会員数は約五千人で、Jリーグに参戦したこともあって増加している。



県民とともにスポーツの価値を追求するガイナレ鳥取の選手たち © Gainare Tottori

## 気軽にスポーツを楽しめる 環境づくりも

スポーツを地域の「文化的財産」に育てるために、ガイナレ鳥取はリーグ戦を戦うだけでなく、誰もが自由に、気軽に、かつ生涯を通じてスポーツを楽しめる環境づくりに積極的に取り組んでいる。

中長期のチーム強化を目指してユースとジュニアのチームを育成するとともに、サッカー普及活動の一環として県内三地区でサッカースクールを開催している。こうした地道な活動の成果として、今年になって初めてユースの選手がガイナレ鳥取に入団した。「ユースで頑張ってきた選手ですし、選手を知っているファンも多いです。その意味で、チームにとってもファンにとってもうれしいことですね」と、濱田さん

こうした育成・普及活動とともに、地域活動に積極的に取り組んでいるのもガイナレ鳥取の大きな特徴である。その一つが、SC鳥取時代から展開している「復活！公園遊び」だ。これは、ガイナレ鳥取の選手やスタッフがプレイヤーとなり、地域の子どもたちに鬼ごっこなど昔懐かしい遊びを教えながら、子どもへの育成に貢献するものだ。

「こうした活動を通じて選手たちも地域の人たちと顔見知りになりますし、それが会員や観客数の増加にもつながっています」と、濱田さんは説明してくれた。

## スローガンは 「強小参年 飛翔」

二〇一一年（平成二十三）年にJリーグでの戦いが始まるにあたって、ガイナレ鳥取は「強小参年 飛翔」という

てスポーツの魅力を高め、将来的には地域の文化的価値に育てようという理念を掲げていた。

その後、二〇〇六（平成十八）年にJリーグ参入を宣言するとともに、チームの運営基盤を強化するために株式会社SC鳥取を設立し、チーム名もガイナレ鳥取に変更した。ちなみに、チーム名の「ガイナ」とは方言で「大きい」という意味で、「大きくなれ」というメッセージを込めたものだ。

## 県民がチームに 創意と工夫を注ぎ込む

アマチュアチームからプロサッカークラブへと転換したガイナレ鳥取であるが、その根底にはやまのみスポーツクラブ時代からの、スポーツの文化的価値を創造しようという理念があった。そのため、ガイナレ鳥取の運営には地域振興に積極的な多くの人々が参画し、ボランティアスタッフとして創意と工夫を注ぎ込むという風土が形成されてきた。その一つがチームを運営するための「芳名帳」だ。

人口約六十万人で、大企業の本社も少ない鳥取県ではチームの運営資金の確保は大きな課題である。そこで採用しているのが、チームの応援に積極的な人に芳名帳を渡して、会員を集める方法だ。

その一つの取り組みが、米子市で進んでいる「YAJINスタジアム」の建設計画だ。このスタジアムはユース育成を中心とした目的としており、その財源は個人の寄付である。スタジアムで使われるレンガやプレートに寄付者の名前を刻むというユニークな協賛方法が進められており、寄付者は着実に増えているという。

スタジアムを中心に人々が集まり、チームとファンがつながり、サッカーという新しい文化的価値を創出する。そこにこそ、ガイナレ鳥取と地域の目指す新しいプロスポーツの姿があるといえる。



県民の力で建設計画が進む「YAJINスタジアム」 © Gainare Tottori



多くのファンで埋まった「とりぎんバードスタジアム」 © Gainare Tottori

プロスポーツで地域を活性化する！

# 県民との感動共有を目指す 島根スサノオマジック

《島根県松江市》

プロチームを結成したいという地元の人たちの熱意を受け、県民参加型で誕生した島根スサノオマジックは、常にファンとチームの一体感を大切にしながら、オール島根のチームを目指している。



観客を魅了するスピード感あふれるプレー © SHIMANE SUSANOO magic/bj-league

## スポーツの世界で 参加型社会を実現

島根県松江市を拠点とする島根スサノオマジックが、日本プロバスケットボールリーグ（bjリーグ）に加盟したのは二〇〇九（平成二十一年）年である。出雲神話のヤマタノオロチ伝説に登場する「スサノオ」と「魔法・魔術」を意味する英語の「マジック」を組み合わせ、神々の不思議な力が宿るイメージをチーム名とする島根スサノオマジックは、翌年のリーグでベスト6入りを果たし、地元をはじめとした多くのファンを熱くさせた。

島根スサノオマジック誕生のきっかけは、バスケットボールのプロチームを結成したいという地元の人たちの思いだった。島根県はかつて「バスケット王国」と呼ばれたほどバスケットボールが盛んで、若年層の競技人口割合は全国屈指といわれている。しかし、プロチームを結成すると、情熱だけでなく経営が必要である。そこで、県民や行政、経済界などが一緒になって県民参加型でプロチームを結成しようという動きになった。

「県民参加型を考えたのは、これからの地域社会のキーワードは参加型社会であり、それをスポーツの世界で実現しよう」と、島根スサノオマジックは、戦績だけに拘泥（こじゆ）するのではなく、プイスターと選手が一緒に燃え続けるチームにしたいと考えていますし、それが指揮官である私の役割です」と、ジェリコヘッドコーチは言葉を続けた。

## 目指すは「オール島根のスサノオマジック」

島根スサノオマジックはリーグ加盟後の最初のシーズンでベスト6入りを果たし、地元プイスターの熱気もさらに高まっている。この勢いを維持しながら、今秋からスタートするシーズンはプレオフを開催できるベスト4を目指す意気込みだ。

「ただし、戦績だけにこだわるのではなく、たとえ負けてもプイスターの心を揺さぶるような試合をしたいですね」と、赤池代表取締役。

島根スサノオマジックの活動拠点は松江市だが、チームが常に心がけているのは「オール島根のスサノオマジック」である。そのために、県内各地で試合を開催し、より多くの県民にバスケットボールの魅力と興奮を伝えている。こうした地道な活動を積み重ねること、島根スサノオマジックは、地域に根差し、県民とともに支え、感動を共有できるプロチームを目指している。

うとしたからです。こう語るのは、設立運動を積極的に展開した島根経済同友会の宮脇和秀代表幹事である。企業だけに頼るのではなく、多くの県民がプイスター（後援会員）となり、チームとともに燃えることで、地域のアイデンティティーや誇りを高めようと考えたのだ。

## リーグ最多のプイスターが 熱い応援

県民参加型のプロチームにするには、財政面からでもできるだけ多くのプイスターの登録や企業の後援が必要である。そこで、毎月二百五十円、年間三千円のプイスターを広く募集するとともに、地元の企業を回って後援を依頼した。プイスターの目標数は三万人で、すでにbjリーグでは最多となる約八千五百人が登録している。

## 試合を通じて選手と プイスターの一体感を

「短期間でこれだけのプイスターを確保できた要因としては、知事や松江市長をはじめとした行政の積極的なバックアップが挙げられます。まさに、県全体を挙げての取り組みだからこそ実現できたと思います」と、島根スサノオマジックを運営する株式会社山陰スポーツネットワークの赤池大介代表取締役は振り返る。赤池代表取締役は、長年にわたって楽天イーグルスなどの球団の設立・運営に関わってきた人だ。

こうした地元ファンの熱意を持続させるためには、チームのレベルを高めることが欠かせない。そこで、試合を指揮するヘッドコーチには二〇〇六（平成十八）年の世界選手権で日本代表を率いたジェリコ・パブリセヴィン

チ氏に就任してもらった。ジェリコヘッドコーチが常に心がけているのは、戦績はもちろんであるが、試合を通じて選手とプイスターの一体感を高めることだといふ。

「空中戦が中心となるバスケットボールでは



試合会場を盛り上げる地元応援団 © SHIMANE SUSANOO magic/bj-league



大きな魅力となっている外国人選手の迫力 © SHIMANE SUSANOO magic/bj-league



選手に的確な指示を出すジェリコヘッドコーチ © SHIMANE SUSANOO magic/bj-league

どうしても身長の高い外国人選手が中心となります。それでも、山陰にゆかりのある選手をはじめとした日本人選手も試合に積極的に出場させて、試合を盛り上げています」と、ジェリコヘッドコーチは語る。実際、地元の選手が登場すると観客席の歓声は高まり、その熱気に応えようと選手たちも素晴らしいプレーを見せるという。

「チームの中には、戦績は素晴らしいのに地元の熱気が伝わってこないチームも

プロスポーツで地域を活性化する！

# 地域密着で地元にも活力をもたらし

## 岡山シーガルズ

《岡山市》

実業団チームから市民クラブチームとなった岡山シーガルズは、多くの市民のサポートを得ながらチーム力を高め、支えてくれる地元にも活力をもたらしつつしている。



粘り強さが持ち味の岡山シーガルズ

### 女子バレー界異色の市民クラブチーム

岡山市を本拠地とする岡山シーガルズは、女子バレーボールのトップリーグ「Vプレミアリーグ」に所属するプロチームである。身体能力の突出した外国人選手はいないものの、それぞれの特性を最大限活かした調和の力で、粘り強くつなぐバレーが持ち味だ。そのため選手全員がポジションの監督という意識を持った、考えるプレーを徹底している。

岡山シーガルズはその運営スタイルも独特だ。オーナー企業を持たず、地元の市民サポーターの支援で運営されるバレー界初の市民クラブチームである。

地域の人々に支えられるクラブチームは、地域の人々と感動を分かち合えるというスポーツならではのメリットがある。

という企業も増加している。

「ここまでのことができたのは多くの人のおかげ」と河本監督は感謝の思いを口にす。多くの人の縁に助けられたと実感するからこそ、人と人とのつながりを何より大切にしてきた。

その精神はチームの活動にも表れている。監督・選手・スタッフが丸となって、バレーボール教室の開催や県のトップアスリート事業への参画、他のスポーツチームとの交流、交通安全キャンペーンへの参加など積極的に地域交流を行っている。

こうした地道な活動が、岡山シーガルズの知名度を上げただけでなく、地

る一方で、オーナー企業を持たないため資金面では厳しい。にもかかわらず岡山シーガルズを率いる河本昭義監督がこのスタイルを選択したのはなぜなのだろう。

それはクラブチームという方式に、バレーボール界発展の新たな可能性を感じたからだといふ。実業団の監督時代、河本監督はオランダではナショナルチームでもスポンサーを集めながら試合するクラブチーム方式を採用していることを知り、こんな方式もあるのかと驚いた。そして、「これならバレーももっと地域にとって身近な存在になり、バレーで地域を元気にできるのではないかと」思いに至った。以来、市民クラブチームという構想を温めていった。

### 実業団チームから市民クラブチームへ

一九九九（平成十一）年、その構想を実現する機会が訪れた。オーナー企



一人一人が監督という意識がチームのモットー

業の人々との距離を近づけ、地元の子供たちにも応援したいという機運を生み出している。

資金面ではまだまだ実業団チームに及ばないものの、岡山シーガルズは地域密着型のクラブチームとしての手ごたえを感じている。チームが地域に溶け込む一方、選手たちのプレーでの活躍が岡山を盛り上げ、活力をもたらしという理想の形ができつつあると感ぜられるからだ。

### 岡山の子供たちの目標になりたい

もちろん河本監督は現状に満足することなく、その先を見据えている。実業団チームも運営の厳しさが増している今こそ、岡山シーガルズがクラブチームとしての指針になりたいと考えている。そのためには長期的視野にたつて、地域の応援の輪をもっと広げていきたい。「地域密着を掲げるからには、地元出身の選手が多く入って活躍してほしいですね。ですから岡山の子供たちにも目標とされるよう、チーム力を高めていきたいと思っています」と、河本監督。市民クラブチーム・岡山シーガルズは、岡山とバレー界に新たな風を呼び込むとしていくようだ。

（文・川西由香理・広島県呉市在住）

業がチームの休部を決定したため、チームの存続をかけて奔走し、富山市で市民クラブチーム「シーガルズ」を発足させたのだ。やがて岡山県笠岡市出身の河本監督の人脈により、岡山のバレーボール界と交流するようになり、二〇〇一（平成十三）年には岡山の複数の企業の支援を得て、シーガルズは活動拠点を岡山に移した。その後、チーム名に岡山という冠名をつけ、地域密着型のクラブチームとしての活動を活性化させた。

しかし、予想した通りクラブチームの運営は資金面では苦労の連続だった。主な収入は法人・個人会員からの会費、広告費などである。実業団チームと異なり、資金集めから始めなければならず、今でも監督自らが企業を回り、スポンサー集めに奔走する。自前の施設

もなく、練習用の体育館の確保に苦労したこともあった。それでも二〇一（平成二十三）年には、今までの個人会員が延べ四千人を数えるまでになったし、法人会員も今では約百五十社に及び、県内には地域をあげて応援してくれるところも増え、クラブチームだからこそ支援したい



着実に増え続けている地元ファン



子どもたちとの楽しい交流も大切な活動

プロスポーツで地域を活性化する！

# 市民が守り育ててきた

## 広島東洋カープ

《広島市》

戦後復興の象徴として設立されたプロ野球チームの広島東洋カープ。県民・市民が育ててきたチームはいつしか広島市の宝となり、かけがえのない存在として地域に根付いている。



マツダ スタジアムを埋め尽くした赤い応援団

### プロ野球界で唯一の市民球団

いくつかのプロスポーツの本拠地となっている広島で、先駆的存在として知られるのが広島東洋カープである。持ち前の闘志あふれるプレーは、「赤ヘル野球」の代名詞となっている。一九四九（昭和二十四）年の創設以来、一貫して地域密着を掲げてきた広島東洋カープは、地元の人々に愛され、熱烈な地元ファンが多いことも知られている。その背景には、プロ野球界で唯一、オーナー企業を持たない市民球団として、広島の人々の手で生まれ、支えられてきた歴史がある。そもそも広島東洋カープは、いまだ原爆の傷跡が深く残されていた広島の人々に、希望を与えようと復興の象徴として

人々のアイディアが随所に盛り込まれたのだ。まさに、市民の手による市民の夢の器として誕生したのである。

三万人以上の収容能力を持ち、広島の玄関口に完成したマツダ スタジアムのインパクトは大きく、県内各地からはもちろん、県外からの観光客を呼ぶ吸引力も果たし、広島の新観光ルートを生み出している。また、駅周辺には新たに新店する飲食店や宿泊施設なども増え、駅周辺の再開発を加速させる起爆剤となった。さらに、球場周辺にレジャー施設や商業施設を設けたポータル・クタウン構想も打ち出された。

今後、広島の玄関口が新たな変貌を遂げて様相を一新するのは間違いなく、マツダ スタジアムを軸に、新しい観光や地域活性化の展開が予想される。

で設立された。この時、自治体の出資と株式募集という、県民・市民一人一人が支える市民球団としてスタート。チーム名は広島市のシンボル鯉城（広島城）にちなんでカープと名づけられた。チームを「びすな」と「樽募金を開始」

ところが、シーズン開始直後から市民球団ゆえの危機に直面する。資金難で球団経営に行き詰まり、翌シーズンには解散あるいは合併という危機に追い込まれたのだ。この時、「おらがチームをつぶすな」を合言葉に立ち上がったのが広島市の県民・市民だった。球場の前には四斗樽が置かれ、樽募金が始まった。多日は一日十万円（当時）あまり集まったという。当時の石本秀一監督もこの熱意に動かされ、企業、地域など組織を通じて寄付金を集めるといふ前例のない後援会方式を打ち出した。

「カープを救え」という声は広島中の大きなうねりとなり、球団、広島の人々が一丸となって奔走した結果、資金も集まりチームの存続が決定した。ここに県民・市民とカープとの間に一体感が生まれ、カープは名実ともに広島の人々とともに歩むことになったのである。チームからファンへの何よりの恩返し

### 広島文化・スポーツのけん引役としても活躍

広島東洋カープは、野球にとどまらず、多彩な地域貢献も行っている。その一つが広島の文化・スポーツ面におけるけん引役である。

広島交響楽団・サンフレッチェ広島と協働した「P3H I R O S H I M A」の活動では、広島のスポーツ・音楽の啓発活動を行っている。また、広島スポーツ界の振興を図る「トップス広島」にも加盟し、スポーツの競技力向上や普及にも一役買っている。いまや広島東洋カープは、さまざまな分野で広島に大きな影響力を与える存在となっている。

今年もまた、プロ野球の熱戦が繰り広げられている。かつて戦後復興の象徴として広島の人々の希望となり、広島の歩みそのものとなってきた広島東洋カープ。時代が変わっても、広島市のシンボルであり続けることには変わりない。

（文・川西由香理）

となったのは一九七五（昭和五十）年の初優勝だ。優勝パレードには三十万人が繰り出し、手を取り合せて、万歳三唱した。



ハイタッチで勝利を祝う選手たち

### 広島に新たな活力を生む「マツダスタジアム」

球団創設から半世紀以上を経た二〇〇九（平成二十一）年、カープと広島にとって新たなシンボルが誕生した。広島駅の東に完成した新しい広島市民球場「MAZDA Zoom・Zoom スタジアム広島（以下、マツダスタジアム）」である。

左右非対称という珍しい形をしたこの球場は、砂かぶり席やパーティフロアなどバラエティーに富んだ観客席も注目を集めている。野球を「見る」だけでなく、「雰囲気を楽しむ」ものへと変える、新時代の幕開けを告げるものとなった。

建設に当たってもカープらしい逸話がある。広島の人々が再び樽募金を行うて資金の一部を集め、球場の施設にも



バラエティーに富んだ観客席もスタジアムの魅力



広島の新しい顔として定着しつつあるスタジアム

プロスポーツで地域を活性化する！

# 夢に向かって走り続ける

## FCバレイソフ下関

《山口県下関市》

全国クラブチーム  
三位の実力

毎週水曜日の午後七時半から、下関市営グラウンドにはサッカーを愛し、

いつかはプロ選手になりたいとの目標を持つ青年たちが集まってくる。下関市の社会人サッカークラブ「FCバレイソフ下関」のメンバーだ。FCバレイソフ下関は二〇〇六（平成十八）年に下関

のリーグへ進め、その頂点はJリーグである。その中で、FCバレイソフ下関は市民が支える社会人クラブチームとして、Jリーグの一つ下のリーグであるJFL入りを目指している。

### 何より大切なのは「夢を持つこと」

「大それた夢だとはわかってはいるんです」とは、代表の美柑俊雄さん。わずか四年で全国三位の成績は「出来すぎ」な面があると冷静に分析する。「謙虚にならなくては」と何度も繰り返しながらも、それはあくまで謙虚に自分たちの力不足を認めるといふもので、同時に、決して夢はあきらめないといふ決意が感じられる。

美柑代表によると、現代は感動できることが少ないという。だからこそ感動は最高のぜいたくであり、そんなぜいたくを市民とともに味わいたいという。願いからチーム結成に動いたという。

「メンバーの中には、プロを目指しながら、さまざまな事情で断念した者もいます。それなら故郷からもう一度、夢を追って欲しいという思いがありました。それに、ひたむきにプロを目指そうとする選手を見て、子どもたちが『僕もあのお兄さんみたいになりたい』と感じてくれたら素晴らしいとの願いもありました」と、美柑代表。もともと現実には、企業スポンサーを持たないから資金面で苦勞が大きい。個人なら年間三千万円、企業なら年間一千万円をサポーターを募って運営費を捻出している。ユライムは地元信用金庫に頼んで援助してもらったものの、遠征費の確保まではできず、大会の度にカンパを募る。勝ち進むことの喜びは大きいですが、その分、遠征費が膨らむから資金集めが大変になる。それでも、勝ち進んでもうと強くなれば、FCバレイソフ下関の知名度が上がり、サポーターが増えてくれると信じて戦っている。今後は、市民との交流イベントなども行い、FCバレイソフ下関の名をもっと広めていく考えだ。

夢をかなえることは素敵だが、夢までの過程を共有し合えるのがFCバレイソフ下関の魅力だ。JFL昇格のユライムを心待ちにしたい。  
(文・藤沢享乃・広島市在住)



全国3位入賞をファンとともに喜ぶFCバレイソフ下関



プロを目指す若い選手たち

市サッカー協会が設立した市内選抜のクラブ。大学生や社会人など約三十人が所属する。昨秋に開催された全国クラブチームサッカー選手権大会で三位に入賞した実力を誇る。



ちょっとした体操が高齢者の体力を増進

も行った。さらに、広島県免許センターでは運転技能測定を行い、体操開始から3ヵ月後の変化を評価。参加した高齢者の歩数や活動量を1～2週間継続して測定する協力も得られた。

「その結果、地域の高齢者は若者に比べて、注意配分や複数作業の反応に対する正確性が劣ることが明らかになりましたが、約3ヵ月間の体操教室後には高齢者の握力が上がり、歩行速度が速くなる傾向が見られ、運転技能検査値、日常の歩行速度を総合的に検討すると、柔軟性のある人は反応のムラが少ないこと、歩行数が多い人ほど柔軟である傾向が示されました。今回の活動では交通事故の低減までは実証できませんでしたが、運転のムラを少なくして、正確性を保つために柔軟性が重要とわかったことは大きいですね。また、運転で危険を回避・予防するためには、日常の歩行が大切と伝えていきたいと思います」と、松村さんは話す。

活動を毎回楽しみにしている高齢者も多く、学生たちにも励ましの声が届いたという。当時の学生メンバーは13人だったが、体操教室の経験がない学生もあり、現場での時間配分や内容の決定が上手くいかなかった時もあったようだ。また、活動が評判になることで次々とオファーがあり、不十分な部分も感じたが、機会あるごとに学生たちの意識と行動も高まったとか。今回の協力機関だけでなく、現在では地域の福祉施設などにも取り組みは広がっている。

さらに、昨年11月には広島市の中心部で広島国際大学が開催した「健康フェア」にも参加し、多くの人の前でメンバーが体操を紹介した。学生たちは、これからも高齢者の元気と社会参加を支援して、健やかな地域活性化を目指したいと意気込んでいる。

(文・平光 穰・広島市在住)

### 若者たちの地域づくり 7

## ふれあい体操で高齢者の交通事故を防止

《広島県東広島市》

東広島市は、学校や企業の誘致により人口が増加し、若い世代と高齢者が共存する地域である。65歳以上の高齢者人口は市全体の約20%で推移しているが、その一方で交通事故による死傷者数では高齢者が全体の半分以上を占め、社会問題となっていた。その対策として広島国際大学の学生と地域が連携するSSP（地域社会貢献）プログラム「チャレンジ！高齢者の底力開発」の取り組みが注目を集めている。

広島国際大学は医療・福祉・健康を柱とした学部を有し、特色のある教育を実践している大学だ。その医療福祉学部で高尾文子教授と学生たちによるボール体操が地域の健康づくりやレクリエーションの支援活動として好評であり、高齢者と高齢者ドライバーの身体能力の向上に役立てようと、昨年からは地元の自動車学校や警察、広島県免許センターと協力をした取り組みが行われている。一定期間の実施後には、その効果の測定も行われた。

「ガンバルーン体操と名付けたボール体操の教室を通じて、私たち学生と地域高齢者の方がふれあい、体操教室の活動前と3ヵ月後の体力や運転技能を比較・評価しました。また、日常生活に体操を活かしていただくように指導し、交通事故の継続的な低減も図りました」。こう語るのは医療福祉学科3年生の松

村洋充さん。最初は体験的に高齢者と一緒に体操を行い、その後11回の体操教室を開催した。ガンバルーンを使う体操やストレッチ体操を指導



活動を楽しみにしている高齢者たち

したほか、体操後は童謡や昔の流行歌などを楽しむ時間も設けられた。

また、東広島市が主催した「参加型高齢者交通安全教室」にも参加し、道路標識を再認識してもらうカルタ取り



# 「伝統×革新」で日本酒業界と地域に元気を取り戻す

株式会社辻本店 社長 **辻均一郎** 〈岡山県真庭市〉

## 月の光に美しく 浮かび上がる町並み

月明かりの夜だった。中学生の少年は、自宅の屋根に腰を下ろし、夜空を見上げていた。

明るすぎたために期待していた星はよく見えなかったが、月の光を受けて家々の霽はらが美しく浮かび上がっていた。また、数メートル先には、かつて高瀬舟が往來していた旭川の川面も見えた。

少年は、出雲街道の宿場町として栄えてきた町の歴史を思い浮かべるとともに、光景の美しさ思わず心を奪われていた。ふと足元の屋根を見まわすと、その広さに驚いた。

「うちの家も大きいなあ、あらためて思いました。と同時に、この家や町並みを大切にしたいと感じました」  
白壁の土蔵や連子格子れんじこうしの家々が連なり、城下町特有の風情を残している町並み。その一角にある本社で、企業家はほぼ半世紀前の思い出を語った。岡山県真庭市勝山の株式会社辻本店の辻均一郎社長（62歳）である。

## 中学時代に

## 二百年の家業を継ぐと決心

辻社長は一九四九（昭和二十四）年岡山県勝山町（現・真庭市）で生ま

れた。

勝山町がある美作地域は古来「うまさけの国」と呼ばれているように、寒気な気候や良質の酒米、豊富な水といった条件がそろっており、古くから酒造りが盛んだ。その中でも創業二百年を超える老舗として知られているのが辻本店である。

辻本店は、創業時は藩御用達の献上酒として、現在の「御前酒」の由来となる「御膳酒」の銘柄で酒造りを行ってきた。そんな歴史を持つ辻本店の長男として生まれた辻社長は、中学生の時に家業を継ぐと決心した。

「姉と妹の二人兄弟でしたし、家業を継ぐのは長男の私だと、ごく自然に思いました。しかし、それ以上に大きかったのは古いものへの強い愛着で、二百年の歴史を持つ家業を守りたいという気持ちが決意させたともいえます」

## 伝統への愛着と 革新への憧れ

辻社長が古いものに関心を抱くようになったのは小学三年生の時である。ある日、母親に誘われて辻社長はテレビで落語を鑑賞した。それは六代目三遊亭圓生の落語で、演目は「居残り佐平次」といつ廓くわくものだった。

もちろん辻社長には何が何だか理解

できなかったが、圓生の喋りを聞いてみると、少しずつ落語の世界に引き込まれているように感じた。それからは、実家にあった三味線や長火鉢といった古いものに強い関心を抱くとともに、落語や古典などに親しむようになった。

しかし、古いものへの愛着は、大学に入ると少しずつ揺らいできた。もちろん「落研おちけん」と呼ばれる落語研究会には所属したが、その一方でビートルズの音楽にも強く惹かれた。辻社長の中で伝統への愛着と革新への憧れが混在するようになったのだ。

充実した大学生活を送る一方で、辻社長は実家の商売が気になってきた。父親がいろいろな企業の役職に就任していた関係で辻本店も債務保証をしていたこともあり、辻本店の財務状態が悪化していたのだ。そのことを知った辻社長は、大学を中退し、まずは東京にあった関連会社の整理に取り組んだ。

「従業員を整理するなど、辛い仕事でした。しかし、自分の判断で決意したのですから、躊躇ちゆうちゆうすることは許されません。結局、東京の会社を整理するまでに四年かかりました。その間、大学の授業では教えてくれないこともたくさん学びましたよ」

こう語ると、かつての苦勞を思い出したかのように、辻社長は視線を上げた。

### profile

#### 辻均一郎 つじきんいちろう

1949年岡山県勝山町（現・真庭市）生まれ。大学を中退後、東京の関連会社を手伝い、77年に社長に就任。新しい日本酒造りに挑むほか、酒蔵を改装したレストランをオープンさせるなど、酒造業の革新に挑んでいる。辻本店は、資本金は2,600万円、従業員数は26名、売上高は3億5,000万円である。

文：城市 創（島根県益田市出身） 写真：林田 悟（岡山市在住）



歴史の重みを感じさせる勝山の古い町並み

## 日本酒離れの中で 新商品を開発

辻社長が勝山の本店に帰ってきたのは一九七七（昭和五十二）年で、すぐに社長に就任した。しかし、辻社長を出迎えたのは若者を中心とした日本酒離れであった。

日本酒の消費量がピークとなったのは一九七五（昭和五十）年頃で、そこから下降を続けた。もちろん地域によつて差があり、岡山県では辻社長が帰郷した頃がピークで、それ以降消費量は

年々減少していった。

その時、辻社長が重点戦略として打ち出したのは新商品の開発だった。地元米、地元の水、継承されてきた技でこだわりの酒造りを目指してきた辻本店の日本酒は市場で高く評価され、県内でのポジションも着実に上がっていた。そうした中で、辻社長は清酒古来の製法である「菩提ぼだいもとづくり」をもとに、独自に改良した日本酒造りに挑んだのだ。それが一九八六（昭和六十一）年に商品化した「菩提ぼだい配もとにこり」である。これは、にこり独自の酸味と風味を残しながら、穏やかな味わいでキレのあるやや甘口の薄にこり酒である。まるで白ワインのような酸味も特徴の一つで、発売以来地元で親しまれている。

## 既存商品とは対極の 酒造りに挑戦

全国的に日本酒の消費量は減少する一方で、その要因を「若者の日本酒離れ」という一言で片づけようとする風潮が強まっていた。それでは成長の道は描けない。そう考えた辻社長は、二〇〇七（平成十九）年、杜氏や蔵人たちとともに、自社のすべての商品を甘い・辛い、新しい・古いといった座標軸で区分けしてみた。その結果、意識しないうちに商品が一定のゾーンに集中してい

ただ。

「これでは成長はないと考え、既存とは対極にある日本酒の開発を決意しました。学生時代の落語とビートルズではな

いですが、私は伝統と革新の両方に魅力を感じていました。だから、対極の商品に挑戦することには、何のためらいもありませんでした」  
と語る。この見直しでは「菩提配ぼだいにこり」だけはかけ離れたところに位置していた。そこで、「菩提配ぼだいにこり」を、伝統と革新を融合させる「核」に位置付け、新商品の開発を進めることとした。こうして二〇〇八（平成二十）年に生まれたのが「9 NINE」である。「9 NINE」は、辛口でキレの良いすっきりとした味わいとフルティーな香りが特徴で、パンフレットに「革新する清酒」というキャッチコピーを使っているように、新しいスタイルの日本酒である。ボトルやラベルもワイン風で、これまでの日本酒のイメージを覆すような商品だ。

## 若い蔵人による 「9 NINE」の開発

「9 NINE」の革新性はそれだけにとどまらない。直接開発にあたったメンバーも革新的であった。一般的に酒造りというと、技を積み重ねてきた高齢な職人をイメージしがちである。ところが、

手を加えて良さを保つバランスが不可欠だと思います」

そう思った思いから、辻社長は勝山の仲間たちとともに、軒先に暖簾のれんを飾ったり、家にあるお雛さまを「斉に飾る」「お雛まつり」などさまざまな活動を展開している。その原点は、まず自分たちが楽しみ、それを通じて「コミュニティ」の大切さ、素晴らしさを再確認することだ。辻社長は、それだけは忘れないようにしたいと語っている。

## 仲間がいるからこそ 挑戦できる

勝山のある真庭市には、「21世紀の真庭塾」という市民グループがあり、全国的にも先駆的な木質バイオマス産業の創出や町並み再生に取り組んでいる。辻社長も塾設立時からメンバーで、町並み再生部会に所属している。

「町並み再生の一環で取り組んでいるのは空き家対策です。それも、仲間とともに入居希望者と直接会い、その人の思いを確認して、大家さんとの交渉を進めています。そうすることによって「コミュニティ」を維持しています」

こうした辻社長たちの努力によって、勝山には古民家や蔵などを活用した工房、カフェ、ギャラーリなどが軒を連ね、歩くだけでも楽しい趣を醸しだしている。

今回の開発でリーダー役を務めたのは、岡山県初の女性杜氏で、辻社長の娘にあたる辻麻衣子さんである。

辻さんは大学を卒業後、東京の企業に就職していたが、酒造りに魅せられて帰郷し、辻本店に入社。前杜氏から技を教わり、二〇〇七（平成十九）年に蔵人の長である杜氏に就任した。また、杜氏を支える八人の蔵人も全員二十代、三十代の若者である。

「9 NINE」という銘柄には、杜氏を含めた九人の蔵人の数と、十分と思うことなく、常に「もう一つ上」を探索し続ける、数字の最上位「自分たち」できる、この上ない味わいと「三つの思い」を込めた。

「展示会に『9 NINE』を出品すると、声も掛けないのに若い女性たちが手にしてくれます。試飲してもらって日本酒だと教えると、全員が驚きますね。『若者の日本酒離れ』と言いますが、その前に若者たちは日本酒の魅力を知らないんです。それなら、まずは日本酒を飲んでもらうことから始めることが大切だと思います」

## 環境シーンの整備こそ 日本酒復活の道

そのことを辻社長は「環境シーンの整備」と表現している。日本酒が登場す

「やってみよう」という言葉を口にした。それは、行動することでもしか現況を打破できないという自分の経験からの言葉である。しかし、それは一人だけではできないことだ。

「会社の蔵人たちがまちづくりの仲間たちがいるからこそ、いろいろなことに挑戦し、実現できました。そのことは決して見失わないようにします。と同時に、常に伝統と革新のバランスをとりながら日本酒業界や勝山の町を元気にしたいですね」

春の風を受けて暖簾がゆくりと舞う勝山の町並み。それを優しく見つめる辻社長の姿からは、地域にしっかり根付いた企業家の強さが伝わってくる。



酒の貯蔵庫を改装したレストラン西蔵の内部



若い蔵人によって開発された「9 NINE」  
(写真提供：辻本店)

るシーン環境を積極的に創っていくことで、結果的に日本酒の消費量を増やすという考えだ。そのために、女性だけのワインパーティーを開催し、そこで日本酒も楽しんでもらうといった試みも展開している。

こうした考えを具体化したのが、辻本店が運営する「レストラン西蔵」である。これは、かつての酒の貯蔵庫を改装し、レストランとして現代に甦らせたものだ。土壁、なまこ壁に覆われ、樺の大黒柱と松の大梁で支えられた蔵の内部は口下感覚の落ち着いた空間に変身し、旬の膳と美酒を楽しむスペースとなっている。

## 伝統と革新を 融合させたまちづくり

辻社長にとって「伝統と革新の融合」は事業だけのテーマではない。小学生のころから愛着を抱き続けている勝山のまちづくりにもつながっている。勝山は古い町並みが残ることから、一九八五（昭和六十）年には岡山県初の「町並み保存地区」に指定された。しかし、辻社長は「保存」という言葉に抵抗感を抱いた。古いままホルムリン漬けにされそうに感じたのだ。

「たしかに古い町並みは大切にしたいですが、それ以上に、勝山の地で暮らす人々がコミュニティを維持しながら暮らすことが大切です。そのためには、古いもの



伝統と革新の文化が交流する空間でもある西蔵

# ビタミンC誘導体で 人々の健康と美容に貢献

〈岡山市〉

生命維持に欠かせないビタミンCの弱点を克服した「ビタミンC誘導体」。それを発明、開発した岡山大学名誉教授が興した大学発ベンチャーのアスコルバイオ研究所は、優位性を活かした商品化に向けて企業連携を深めながら、人々の健康と美容に貢献しようとしている。



アスコルバイオ研究所が開発した商品群（写真：阿部章仁）

## 生命維持に不可欠なビタミンC

ビタミンCは人の生命維持に欠かせない物質である。この三十年近くの研究の結果、老化促進抑制やがん、アレルギー、糖尿病、高血圧、脳・心臓疾患など生活習慣病の予防・治療に重要な役割を果たしていることが解明された。

もともとビタミンCは生体を作り出す抗酸化物質で、動物は今でも自分の体内で必要な時に必要なだけ生成してストレスと闘っている。しかし、人間やゴリラ、チンパンジーといった霊長類だけは進化の過程でビタミンC合成酵素の遺伝子に変異を受け、酵素が失活した。その結果、霊長類はすべてビタミンCを作り出すことができないのである。

ビタミンCが不足すると、貧血や衰弱が起き、皮膚や歯肉などから出血し、最終的には壊血病で死亡することもある。壊血病に至る過程では、がんやアレルギー、生活習慣病が起ることも解明されており、このことからビタミンCが免疫やホルモン調節などの生体防御機能に大きな役割を果たしていることが分かっている。

株式会社アスコルバイオ研究所の山本

にすること、若者の雇用を含めて地域に貢献すること、そして国民の美容と健康に貢献することだ。そこで、大学在職中の二〇〇四（平成十六）年にアスコルバイオ研究所を設立した。「大学発ベンチャー」は全国にたくさんありますが、特許だけでなく商品も持っている大学発ベンチャーは少ないと思います。そこで取り組んだのは、せつかく開発した物質ですから、広く認知され、使われて欲しいと願っているからです」と、山本社長。ちなみに、社名の「アスコルバイオ」とは（アスコルビン酸＝ビタミンC）＋バイオテクノロジーに由来する。

## 企業連携で市場開拓・商品開発を強化

アスコルバイオ研究所は、設立の翌年にアスコルビン酸2・グルコシド（AA・2G）が栄養機能食品（食品添加物）

格社長は常々「ビタミンCについて、ビタミンCはアンチエイジングホルモンである」「人間はビタミンC合成酵素の欠損症患者であると認識することが大切である」と講演会等で力説しているが、その理由は「ここにある」。

## 不安定なビタミンCを安定な誘導体

ビタミンCを摂取するためには、野菜や果物を食べることが必要である。しかしながら、近年、農薬の大量使用、ハウス栽培への移行、物流システムの変化等により、野菜や果物に含まれるビタミンC量が半分以下に減少していることが知られている。その結果、ビタミンCをサプリメントという形で補充しなければならなくなっている。

しかし、そこで大きな問題となっているのは、ビタミンCは不安定な化合物で、空気中の酸素や熱、光によってすぐに酸化し、壊れることである。また、ビタミンCは消化管から血管内に、さらに細胞内に吸収される際、専用のトランスポーターと呼ばれる取り込み口からしか入れない。そのため、体内に吸収しても、一時に大量に摂ればとるほどすぐに尿

の認可を得たのを契機にビタミンC誘導体の優位性をさまざまな分野で応用展開している。独自ブランドのビタミンCサプリメント「プロヴィタC」の製造販売をはじめ、多数のOEM製品の受託製造も行っている。

また、AA・2Gを配合したルイボス茶抽出粉末「ルイボスC」や消臭抗菌液スプレー「ハーバルアクアC」もある。なお、この誘導体が世の中に出現するまでは、ビタミンCは化粧品としては使用されていなかった。しかし、今では大手メーカーが美白・美肌化粧品の許可（医薬部外品）を取得し広く使用されている。

その一方で、備前化成株式会社（岡山県備前市）や株式会社ファイナル（鳥取市）、株式会社OHKメディアサービス（岡山市）と連携し、市場開拓や商品開発を進めている。

「商品開発には時間がかかりますが、可能性はほとんど広がっています。それを実現するためにも、自ら開発研究の第一線で頑張り、良い成果を生み出したいと思います」と、山本社長は力強く語った。

岡山で生まれた新しいビタミンCは、多くの人たちの健康と美容に貢献しながら、常に新しい世界を開拓しようとしている。

中に排出されてしまう。

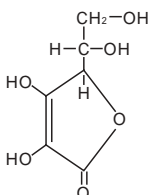
こうしたビタミンCの弱点を克服し、体内でも維持される新しいビタミンC誘導体を開発したのがアスコルバイオ研究所の山本社長である。山本社長は二〇〇五（平成十七）年に定年退官するまで岡山大学薬学部の教授で、在官から予防医療の観点にたって、ビタミンC誘導体の開発に取り組んでいた。

「そこで、酸素の攻撃を受けて壊れてしまうビタミンCの最も弱い部分にグルコース（ブドウ糖）をバイオ技術で結合させて安定させました。これが安定型といわれるアスコルビン酸2・グルコシド（AA・2G）＝ビタミンC誘導体です」

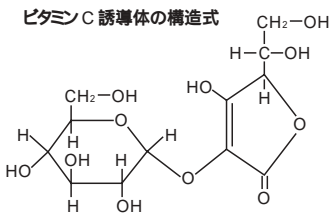
この新しいビタミンC誘導体は酸素や水、熱では壊れず、体内に入ると消化器酵素の働きでゆっくりとビタミンCとグルコースに分かれ、ビタミンCは持続的に細胞に供給され、作用を発揮する。このように、ビタミンCが作用を発揮する前段階の物質という意味で誘導体又は前駆体と表現されている。

これまでのビタミンCは空気や水に触れると壊れてしまったため、ドリンク剤や清涼飲料水に入れたとしても、化学物

ビタミンCの構造式



ビタミンC誘導体の構造式



右側のビタミンCにグルコースを結合させたビタミンC誘導体



開発研究の第一線で頑張りたいと語る山本社長（写真提供：アスコルバイオ研究所）

# 先行技術の開発で

# 付加価値を提供する田中製作所

《鳥取市》

独自の技術や工法で情報通信機器メーカーから信頼を得ている田中製作所は、常に先行技術の開発に注力し、メーカーに付加価値を提供し続けている。

## 溶接から 金属プレス加工に進出

新製品が登場する度に、薄くかつ軽くなっている携帯電話やスマートフォン。それを支えているのは、多数の電子部品をコンパクトに収納し、かつ外部からの衝撃などから守っている筐体である。その製造で、メーカーから「あの会社に相談すれば何とかしてくれる」と厚い信頼を得ているのが、鳥取市の株式会社田中製作所である。

田中製作所の創業は一九六五（昭和四十）年。田中勇前社長（故人）が溶接と穴開け加工の事業で創業した翌年、鳥取三洋電機株式会社を鳥取市に進出すると、協力工場としてカーズアレオなどの部品組立を行うようになった。当時のカーズアレオは人気が高く、製造が間に合わないほどだった。その後、「これからは金属プレス加工

と金型の時代になる」という鳥取三洋電機のアドバイスもあって、田中前社長は一九七〇（昭和四十五）年に金属プレス部品の加工を始めるとともに、

有限会社田中製作所を設立した（一九八四年には株式会社組織変更）。そして、一九七九（昭和五十四）年には金属プレス用金型の製作を開始し、

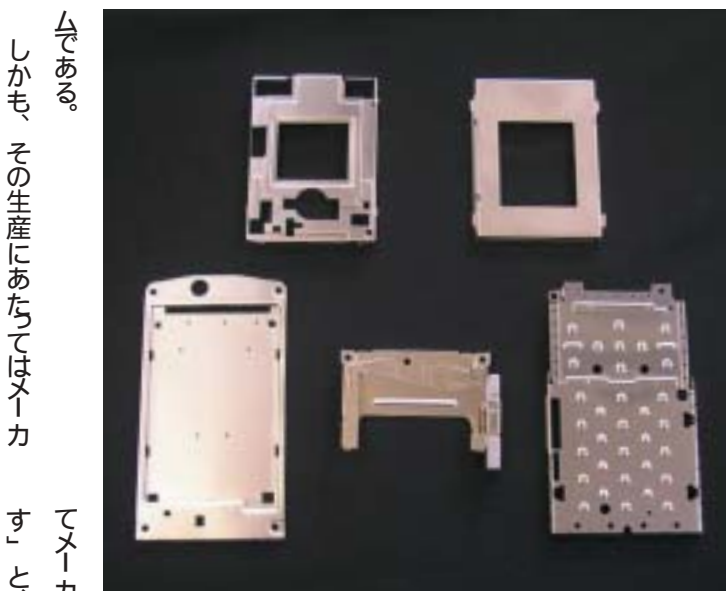


情報通信端末を外部の衝撃などから守っている筐体



効率的な加工を可能にしたプレス金型

薄板難加工ステンレス材の高精度加工を既存プレス機設備でも可能とする「特殊絞り加工法」である。「これにより、一般の加工法では発生しやすい歪みやしわを克服するとともに、「ノストを抑えながら携帯電話を軽量化・薄型化することが可能となった。」



新工法を活用したさまざまな筐体

## 国の補助事業を活用して 先行技術を開発

情報通信端末の主流は携帯電話からスマートフォンに移行しつつあるが、「強く軽くて薄い端末」へのニーズはますます高まっている。

そうしたニーズに対応するために、田中製作所は経済産業省中小企業庁の支援事業を活用して、平成十九年度から三年間、強度が高くしかも軽量の高精度アルミ合金の複雑加工技術を開発する「3軸プレス加工法」の開発に取り組んだ。その成果が今春新発売された世界最薄のスマートフォンに装備されているアルミサイドフレーム

## 技術を使った 付加価値を提供

携帯電話やスマートフォンではメーカー間の競争は激化しており、デザイン性を重視した製品をタイミングよく発売するために加工の自由度や納期の短縮といったメーカーのニーズは高まるばかりである。そうしたニーズに対応す

るために、田中製作所では国の補助事業などを活用しながら先行技術の開発に積極的に取り組む。二ツズが顕在化した時にはすぐに提案し、生産できるようにしている。

「そのためには、メーカーのニーズをいち早くキャッチすることが必要です。そこで東京に営業拠点を設置し、技術者が中心となってメーカーの情報を収集していきま

す」と、竹内常務は説明してくれた。3軸プレス加工法の開発に続いて、田中製作所は平成二十一年度から「プレス多層筐体成形技術の開発」に取り組んでいる。これは、切削加工でしか加工できなかった複雑性の高い筐体部分をプレス加工に置き換えてモバイル機器筐体製造の手法を革新するもので、ターゲットは世界のパソコンの「軽量化・薄型化」をリードするアップルの「Mac Book Air」だ。

## 独自の特殊絞り加工法で 携帯電話でのシェアを拡大

田中製作所が携帯電話の筐体を生産するようになったのは約十年前である。携帯電話では、ハイブリッド筐体として形状を補強するためにインサート板金部品が使われるが、その高強度化と加工の自由度は大きな課題であった。

そこで田中製作所が開発したのが、



チャレンジ精神が満ちた第一工場



工業団地内に立地している本社・工場

# 戦略的農業を実践し、 島根の農業活性化を推進する佐々木 一郎さん

安全でおいしい作物を作ることはもとより、一人当たりの生産高や販売ルートの開拓といった経営面の強化が「儲かる農業」には不可欠と語る佐々木 一郎さん。その戦略的農業の考え方や実践方法、方針決定や転換までの苦労を話してもらった。



profile

佐々木 一郎 ささき いちろう

1959年島根県浜田市生まれ。大学を卒業後、代々続く農家の後継ぎとなる。96年に有限会社佐々木農場を設立し、代表に就任。2008年には有機栽培の仲間たちと株式会社ぐり〜んは〜とを設立し、代表に就任。

文・藤沢 享乃（広島市在住） 写真・石中 仁（広島市在住）

## 七代目の農家の後継ぎ

島根県浜田市の市街地から車で十分ほど山手へ進むと、経営面積四一〇アールの有限会社佐々木農場がある。このうちの三〇アールは九十五棟のビニルハウスが占める。山を削って造成し、ビニルハウスを建てていったため、ビニルハウスの周囲は山ばかりだ。青い空と緑の山々に囲まれた白いビニルハウス群はまるで絵のように美しい眺めだが、それは佐々木農場代表取締役の佐々木 一郎さん（51歳）の二十八年間の努力の賜物である。

佐々木さんの家は、代々農家を営んでおり、佐々木さんは七代目の後継ぎとして育てられた。そのため高校を選択する時も「農業高校でなくてはダメ」と両親に釘をさされたほどだ。しかし、



全国各地に配送される収穫野菜

大学進学を考えていた佐々木さんは、大学で果樹の勉強をすることを条件に進学を許してもらった。

「大学は農学部でなくてはダメと、とにかく徹底していました」と、佐々木さんは当時を振り返る。

佐々木さん自身は教師になりたいという夢があり、両親に内緒で教員免許を取得したり、大企業に勤める大学のテニス部OBから「うちの会社へ来ないか」といった誘いを多く受けていた。

周囲からも「本当に農業をやるの?」と何度も聞かれたが、後継ぎとしての責任を果たすべく、卒業後、一年だけ農業試験場に勤めた後、帰郷した。

## 従来の農業では 純利益は六百万円

いざ農業を始めてみて佐々木さんはがくせんとした。早朝から夕方までの長時間労働、年中無休で、肉体的にもハードな仕事が多い。当時は養豚業も行っていたので、売上は二千万円以上にはなっていたが、さまざまな経費を引くと純利益は六百万円ぐらいしかなかった。しかも、その額はあくまで家族総出で働いた結果で、一人当たりの純利益に換算すると百万円にかならない。

代々の農家だから土地は自分のもの

食糧はほぼ自給でき、人件費といつても家族だから無給のようなもので、生活するには困らない。そのため、農業の利益率の悪さを見逃してしまいがち

だが、苛酷な労働、収入の低さに加え退職金はなく、社員の厚生年金に比べて国民年金の受給額は少ないと、悪い条件ばかりといえた。

このままでは日本の農業に未来はない。なんとか儲かる農業、従事者にとって働きやすい農業を考えなくては。その思いが佐々木さんの転機となった。

## 農業は グローバル化できない産業

佐々木さんがまず行ったのは、大学時代の恩師の紹介で、儲かる農業を実践している農家を直接訪ねることだった。岡山県内だけでなくデンマーク、ドイツ、オランダ、フランスなど海外の農家も訪ね、改革すべき点は何かを探っていた。

わかったことは、外国の農業の真似はできないということだった。日本では、外国の農家のような機械化や大規模化、効率化が難しい。なぜなら、農地が狭いからだ。また、日本の多くの製造業のように、グローバル化を目指して、収穫物を海外へ輸出して利益率を高めるといった方法もリスクが高いと

判断した。

残された道は、日本の消費者を相手に利益率の高い作物を提供することだ。

では、日本の消費者が買いたい農作物の条件は何だろうか？佐々木さんが導き出した答えは、

鮮度の落ちやすいもの（新鮮なものが欲しいので、たとえ外国産の方が安くても、国内産のものを買う確率が高い）

安全性を求められるもの（日本の消費者は食の安全性に敏感である）

トレーサビリティのとれるもの（安全性の確認として、誰が、どんな方法で、どのように作られたかを消費者は知りたい）

食べておいしいもの（日本の消費者は味に敏感である）

この四つのポイントだった。

「消費者のニーズに合っていれば、こちらの希望価格に近い値で売れます。それが利益率の良い農作物を作る第一歩だと思いました」と、佐々木さんは振り返った。

## 高利益率の農作物を求めて データ解析

佐々木さんが次に目をつけたのが、各農作物の純利益率だった。





# 藩ものがたり 7

# 広島藩

《広島市》

内海航路に面し、大坂とも舟運の便に恵まれていた広島藩は、早くから重商主義的な政策を打ち出すとともに、鉄・紙・塩などの生産も振興していた。また、学問所は農工商の子弟にも入学を許可するなど、人材育成にも積極的であった。



広島市の中心街にある広島城（写真提供：フォト・オリジナル）

## 福島氏の改易と浅野氏の入部

豊臣政権下では中国地域の大部分は毛利氏の領するところであり、広島はその城下町であった。しかし、関ヶ原の戦いにおいて毛利輝元が西軍の総大将に祭り上げられる形となり、敗戦後毛利氏は周防・長門二国に減封されてしまった。

戦後、安芸・備後両国を領する広島藩主となったのは、秀吉恩顧の武將である福島正則である。正則は当時の武断派武將の代表格の一人だが、治世にもすぐれ、広島藩税制の大本は正則によって確立されている。また、土木工事を盛んに進め、城下町の建設を図った。

しかし、洪水の被害を受けた広島城を無断で修築した罪で改易となる。この改易は大坂の陣から間もなくの元和五（一六一九）年で、秀吉恩顧の大名を排除する一環とも言われている。福島氏に代わって広島に入部したのは、

秀吉の妻・北政所の甥にあたる浅野長晟である。長晟は豊臣政権五奉行の一人である長政の子で、もともと秀吉の家臣だったのだが、関ヶ原の戦いでは正則同様東軍に味方し、兄幸長を継いで和歌山藩主となっていた。大坂の陣で大きな戦功を上げたことなどにより家康の信任が厚く、家康の三女を妻としている。浅野家は、この後幕末まで広島藩主を務めた。

なお、長晟の子で二代藩主の光晟が後を継いだ時に、その兄（庶子）の長治により支藩の三次藩が立てられている。三次藩は五代続いたが、嗣子断絶で藩領は本藩に還付された。

## 商売上手だった広島藩

江戸後期の経済学者である海保青陵によれば、広島藩は他国米を割安に買うては、収納した年貢米とともに大坂の相場を見合わせて有利な時期を見計らつてまとめて大坂に送り、大きな利益を上げていたという。

によって廃嫡され、自宅に幽閉されていた間に執筆されたものである。

幕末の広島藩財政は極度の窮乏に喘いでいたが、安政五（一八五八）年に分家から本家を継いだ十一代藩主長訓は、当時改革派の首領と目されていた辻将曹を年寄役に任命し、同時に才能ある中・下級武士の人材登用を行い、文久改革を断行した。この改革は軍政改革と郡政改革に重点を置いて進められ、軍政においては西洋式を採用し、銃砲の近代化を推し進めた。また、郡村単位で農兵を編成している。地方支配においては強力な中央集権的統制を図り、年寄の一人に新しく設けた郡代を兼任させ、その下に郡奉行を配するなど郡政機構の改革が行われた。

長州征討に当たっては、広島藩は征討には消極的で、むしろ長州藩に近い立場で幕府と長州の仲介に努めていた。第二次征討の際には幕府から先鋒を命じられたが、これを固辞している。その後、慶応三（一八六七）年に土佐藩と共同で大政奉還の建白書を幕府に提出しようとして計画するとともに、これが採用されなければ武力倒幕を目指すとする薩摩・長州と出兵の同盟を結んだ。しかし、結局、倒幕の密勅が広島藩に与えられることはなく、広島藩は幕末動乱の主流から外れていったのである。



塩田で栄えた当時を偲ばせる竹原市の町並み（写真提供：フォト・オリジナル）

監修：広島県立文書館

広島藩は内海航路に面して西回り海運や九州航路と結ばれ、大坂とも舟運の便に恵まれるなどの地の利から、早くから重商主義的な政策を打ち出していた。慶安二（一六四九）年に尾道・木浜・竹原・三津の四力所に新たに藩の米蔵を設けて貢米を収納することとしたが、これは藩の手で直接貢米を大坂に送り、大坂の蔵元に対して有利にその販売を行っていたものとされている。

広島藩ではまた、鉄・紙・塩などの生産も振興されていた。鉄は、すでに藩政当初から専売の仕法で生産の増大が図られていたが、元禄九（一六九六）年には城下の元安川河畔に鉄座を置いて、藩内の産鉄をこごとく買い占めることとした。これは鉄の藩専売制の仕組みの確立を示すものであろう。紙もまた宝永三（一七〇六）年に紙座が設けられ、紙・楮は完全に藩専売制下に置かれた。

製塩については、慶安三（一六五〇）年に竹原大新開に入浜式塩田が開かれ、その後も塩浜を目的とする新開が続くなど、塩業は大きく発展した。こうして広島藩内海の塩は、北前船の帰り荷として東北・北陸地方にまで移出されるようになったのである。

しかし、全国的な商業経済の進展による諸藩の財政運営の行き詰まりは商

## 幕末における広島藩

売上手の広島藩にも例外なく訪れ、江戸時代中期以降、藩財政は逼迫した。さまざまな藩政改革も試みられたが、災害の頻発や度重なるお手伝い普請などによる支出が重なり、嘉永五（一八五二）年には新札の価格を旧札の五百倍とし、旧札との引き換えを強制する「五百掛相場」を發布するなど、強引な施政が見られるようになる。

広島藩は儒学の盛んなところで、五代藩主の吉長、七代藩主の重晟はともに学問所を設け、特に重晟が開いた学問所は頼山陽の父である頼春水らを儒官に登用し、農工商の子弟にも入学を許した。春水自身も竹原の富商の出であった。ちなみに、山陽の著作として知られる『日本外史』は、山陽が脱藩行為



頼山陽が『日本外史』の原稿を書いた居宅

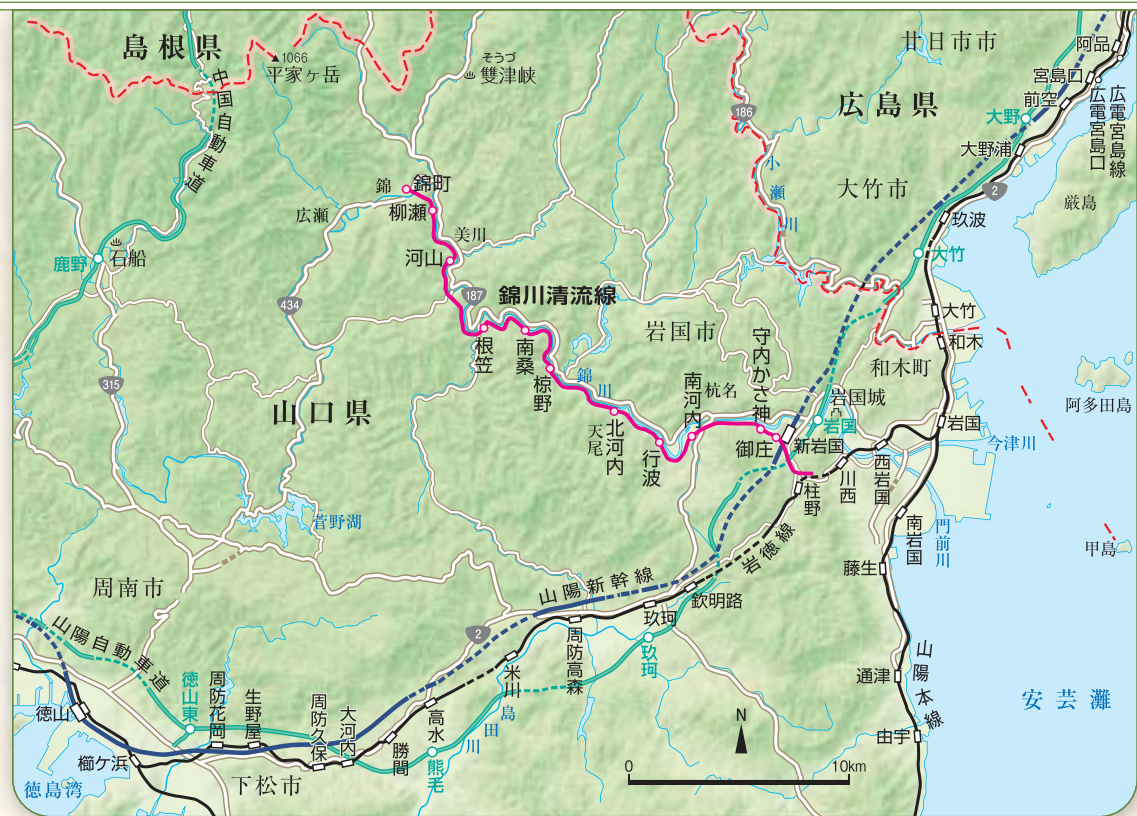
# 錦川清流線

《山口県岩国市》

JR山陽本線岩国駅と錦町を結ぶ錦川清流線は、路線を存続させたいという関係者たちの熱意に支えられ、恵まれた自然を満喫できる路線として人気を集めている。



錦川沿いを走る錦川鉄道の列車



錦川清流線は正確にはJR西日本岩徳（がんとく）線の川西 - 柱野間にある森ヶ原信号場と錦町駅を結ぶ路線である。  
作図：小学館クリエイティブ



電気自動車を改造した「とこととトレイン」



光る石で装飾されたトンネル内



四季折々の美しい景色が楽しめる沿線

## 前身は山陰と山陽を結ぶ「岩日線」

岩国駅を出発した錦川清流線の列車は、かすかな振動をたてながら、約一時間をかけて錦町へと進む。その名の通り、清流・錦川に沿って走り、春は桜や菜の花、夏は新緑、秋は紅葉、冬は白雪と、四季折々の美しい景色が車窓に広がる。

錦川清流線の前身は「岩日線」と呼ばれ、岩国駅と島根県の山口線日原駅を結ぶ陰陽連絡鉄道として期待されていた。また、当時、錫やタンゲステンを採掘していた日鉱河山鉱業所からの旅客輸送の役割も担うはずだった。絶景が広がる路線だが、川沿いに迫った山の中を走るため、鉄道以外の交通手段は不向きだったのである。

沿線住民にとって悲願だった岩日線は、一九六〇（昭和三十五）年に川西錦町区間が開業し、全線開通に向け

もらい、輸送量を拡大し、さらには路線沿いのまちも活性化しようと考えたのだ。

「そこでこだわったのが乗り心地です」。こう語るのは錦川鉄道の清水晃一社長である。車中の快適性を重視し、新型車両四両を導入した。また、車両の外

て工事が着々と進んでいた。しかし、一九八〇（昭和五十五）年の「国鉄再生法」により工事は中断され、開業していた区間も赤字を理由に第三セクターの錦川鉄道株式会社に移管された。そのため、一度も列車が走らずに終わった路盤が今でも残っている。

## 観光で路線の存続を図ろう

何とかこの路線を存続させたい。地元住民の願いは強かったが、少子高齢化による過疎化が追い打ちをかけ、輸送量は大幅に減少した。

そうした中で、二〇〇六（平成十八）年には関係行政機関と協力しながら、鉄道を再生するための取り組みが始められた。その中核とされたのが観光だった。路線存続のためには、採算が合う鉄道にしなければならない。そのためは、路線住民の利用だけに頼らず、観光客を呼び込み、錦川清流線に乗って

側に描かれるイラストはコンペで募り、地元住民らの投票で決めた。こうすることで、「私たちの鉄道」という意識を高めてもらおうと考えたのだ。

## アイデア満載のイベントでリピーターを確保

錦町駅からそうづ峡温泉駅までは、山口県で開催された「きらら博」で人気だった電気自動車を改造し、「とこととトレイン」として走行させている。トンネル内は、地元の幼稚園児や大学生が創作した光る石の装飾に彩られ、まるでテーマパークに迷い込んだような不思議な旅が楽しめる。特に子どもたちに人気で、年間三万五千人ほどが利用する。

そのほか、錦川清流線を途中下車して、そこからフーキングを楽しむイベントやホテル見物のための「ホテル列車」を走行させるなど、アイデア満載のイベントを実施することで、リピーターを多く獲得する考えだ。

地域住民と手を取り合ってアイデアを絞り、自らの手で収益率を上げていく自立の道を選択した錦川鉄道。そんな思いが満ちているからこそ、錦川清流線は心がホッと和むような小旅行を提供してくれる。

（文・藤沢享乃）



純粋な和様で、整った外観が印象的である。

JR山陽本線福山駅から車で約十分、中世の港町・市場町の遺跡である草戸千軒町遺跡の近くに建つのが明王院五重塔である。

明王院は真言宗大覚寺派の仏教寺院で、五重塔は南北朝時代に建立された。純粹の和様で、よく整った外観と手法により、南北朝時代を代表する建築物といわれている。一重目に壇が設けられ、二重目から心柱が立ち上がる特異な構造となっている。

壇の周囲には極彩色の仏画や文様が描かれており、隣接する本堂も国宝に指定されている。



五重塔に隣接する本堂も国宝に指定されている。

写真：平本 勝美（福山市在住）